

## ○論説：現代人にとって「いのち」とは何か —生命倫理に関する意識調査結果から—

遠藤 薫\*

### 1. はじめに

近年、医療技術の急激な発展によって、「いのち」に関する認識が大きな揺らぎの中にある。

人間にとって根源的な問題である「いのち」に関して、現代日本人はどのように考えているのか。

本稿は、この問題に関して、筆者が2015年5月に行った意識調査の結果（未だ単純集計レベルであるが）にもとづいて考察するものとする。

意識調査の概要は、以下の通りである。

調査タイトル：「生命倫理に関する世論調査」

調査主体：遠藤薫

実施時期：2015年5月

調査対象：全国の満20歳以上80歳未満の男女

調査方法：インターネットモニター調査、2010年国勢調査に基づいて県別性別年代別に割当、標本数5168)

### 2. 「いのち」は大切な

まず、前提としての人命尊重について聞いたところ、「人のいのちは何より重要だ」という意見に、「まったくそうだ」と答えた人が約6割、「まあそう思う」を合わせると、9割以上の人が肯定の意見を表明している（図1）。

ただし、「自分の命」と「他の価値」を比較した場合、「他の価値を優先さ

---

\* 学習院大学法学部政治学科教授。

せる」人が約5割<sup>1</sup>を閉めている（図1）。

一般論としては「人命第一」であるが、「自分の命と引き替えにし得る価値」はあると考える人が半数ということである。

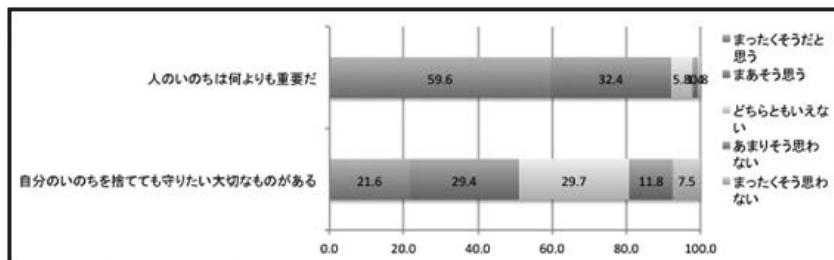


図1 「いのち」の大切さ (%)、N=5168)

では、「自分のいのちよりも大切なもの」とは何か。「自分の命を捨てても守りたいものがある」という意見に賛成しなかった約2割の人を覗いた人に尋ねた。その結果、「家族や愛する人のいのち」という回答が、複数回答ではほぼ全員、単独回答でも9割を占めた。その他、複数回答では、「仲間のいのち」が5割弱、「弱いもののいのち」「お金」「地球環境」が3割強であった。「国歌」「社会的理想」「真理」は2割弱であった。

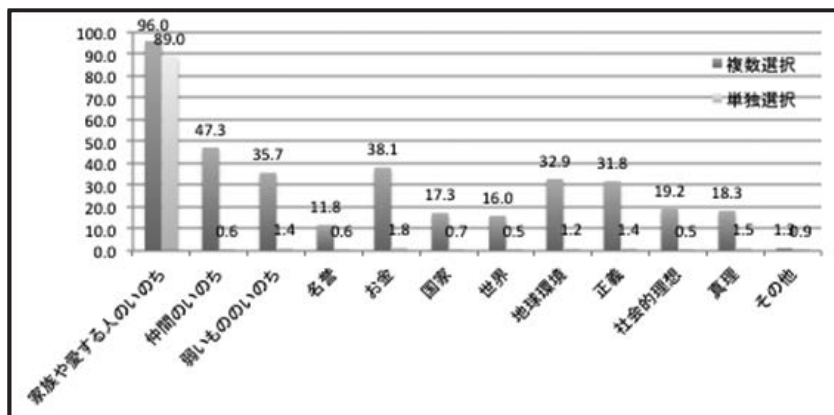


図2 自分のいのちよりも大切なもの (%)、N=4404)

1 「まったくそうだ」と答えた人が約2割、「まあそう思う」人が約3割。

### 3. 生まれてくる「いのち」

では人びとは「いのち」の誕生について、どのように考えているだろうか。

図3は「子どもをほしいと思う理由」について尋ねた結果である。

これによれば、子どもを持つ理由として「パートナーとの愛の証しとして」「幸せな家庭をつくるために」には肯定的な人が4割を超え、否定は三割に達しない。一方、「結婚の自明視」や「子どもを持つことの自明視」「家の存続のため」などは3割程度が肯定しているが、反対はそれを上回る。

最も否定が多いのは、「自分の夢を継承してもらうため」であった。

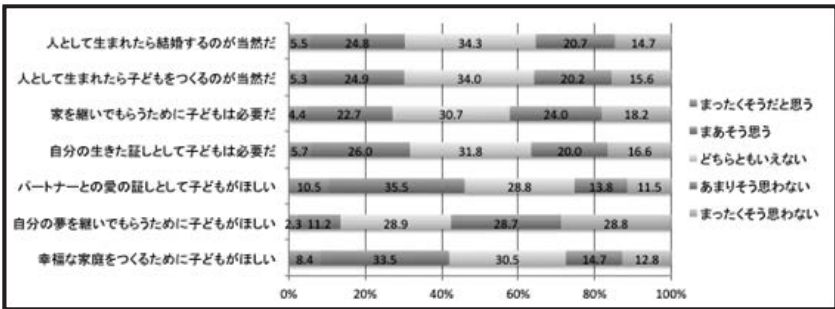


図3 なぜ子どもがほしいのか (% , N=5168)

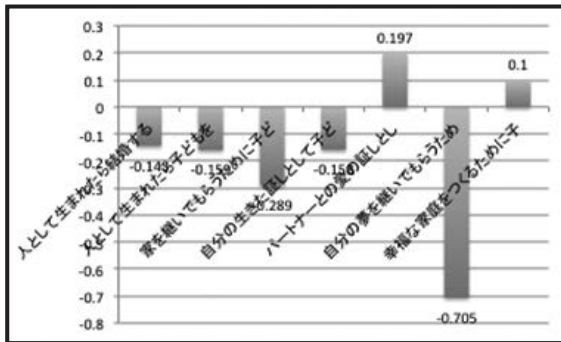


図4 なぜ子どもがほしいのか (数値尺度<sup>2</sup>, N=5168)

2 「まったくそう思う」を2、「まあそう思う」を1、「どちらともいえない」を0, 「あまりそう思わない」を-1, 「まったくそう思わない」を-2として、平均値をとった。

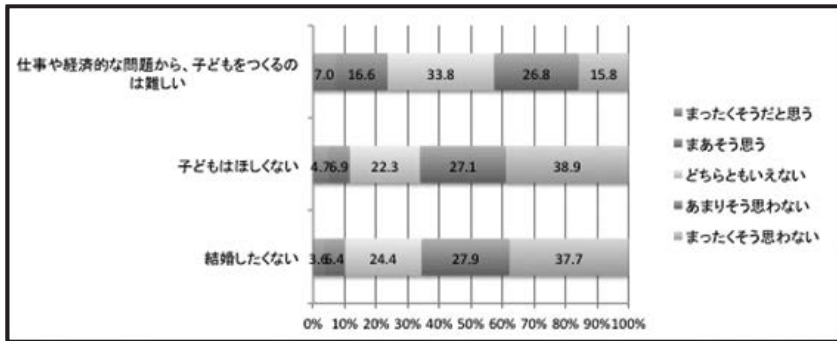


図5 子どもをつくる上での問題

また、血のつながらない「家族形成」である「養子」について尋ねた結果が図6である。

「子どもができなかった」場合の選択肢としての「養子」については肯定的な意見が1割強、否定的な意見が5割強で、圧倒的に否定が多い。

他方、「家庭に恵まれない子どもたち」への社会的貢献としての「養子」については、肯定的な意見がおよそ1割5分、否定的な意見が5割弱で、やはり圧倒的に否定が多い。

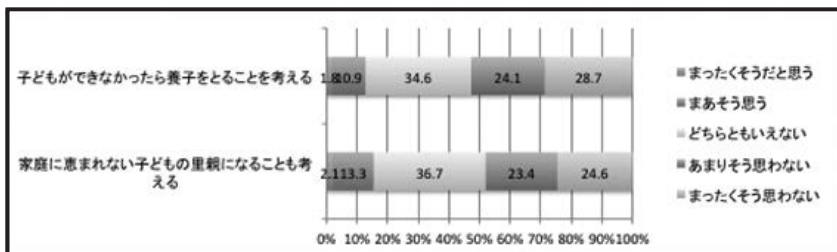


図6 「養子」について

#### 4. 「いのち」をつくる技術について

では、「いのちをつくる技術」について、人びとはどのように考えているだろうか。

図7は、「妊娠中絶」について尋ねた結果である。「妊娠は神聖なもの」と考える人も4分の一程度いるが、やはり「本人による決定に任される」と考える人が半数を超えている。

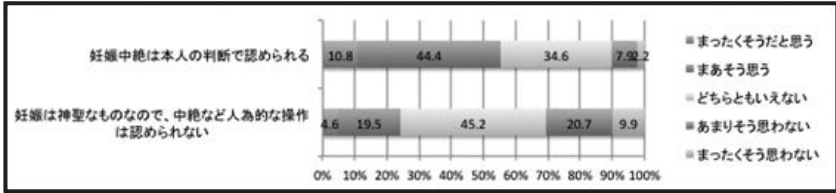


図7 妊娠中絶について

図8は、「体外受精」に関する意識である。

「夫の精子と妻の卵子による体外受精は認められる」と考える人が6割近い（反対は5%程度）ののに対して、「夫の精子と妻以外の卵子、または妻の卵子と夫以外の精子による体外受精は認められる」と考える人は4割程度しかいない（反対が4分の一程度）。

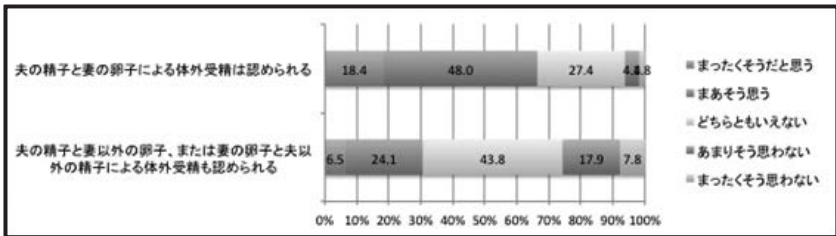


図8 体外受精について

さらに、「代理出産」について尋ねた結果が図9である。

「近親者による代理出産」、「ビジネス契約による代理出産」のいずれも肯定する人は2割程度であり違いは無い。ただし、否定する人は、前者で35%、後者で約45%である。

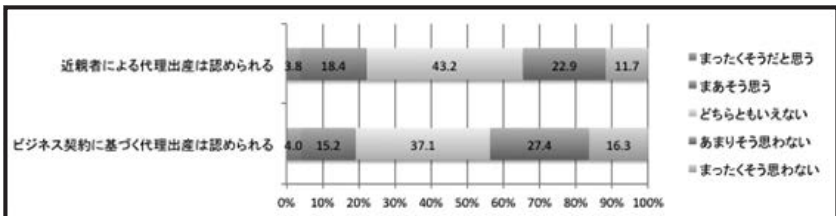


図9 代理出産について

図10は、出生前診断や遺伝子治療などについての意見を集約したものである。

先天的異常を調べる出生前診断については約55%が肯定的な考えを示し、出生前診断の結果によっては中絶も認められると考える人も約5割いる。また、卵子や精子の冷凍保存についても5割を超える人が肯定的である。

ただし、受精卵への遺伝子操作を認める人は15%程度にとどまり、むしろ否定的な人が45%を超えている。

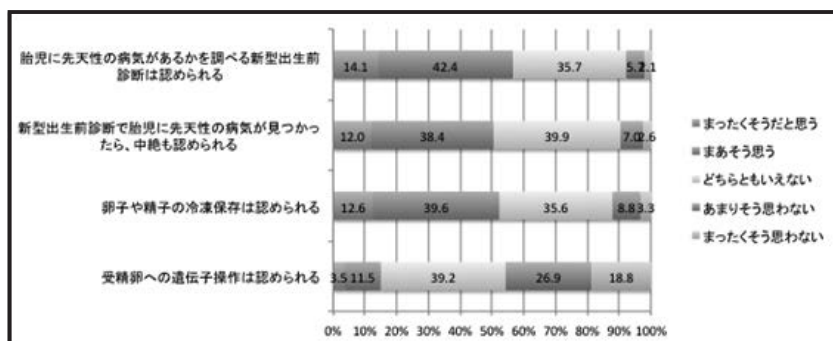


図10 遺伝子医療などについて

図11は、「不妊治療」の経済的負担に関するものである。

一般に、「不妊治療」は高額な医療費がかかると考えられている。

これを反映してか、「不妊治療は経済的に恵まれた人だけのものである」という意見に賛成する人がおよそ3割いる。ただし、この意見に反対する人も3割5分程度いる。「そうであるべきではない」という規範を示すものと考えられる。

したがって、「不妊治療には国家による支援も考えられるべきである」という意見に賛成する人は、6割を超えている。

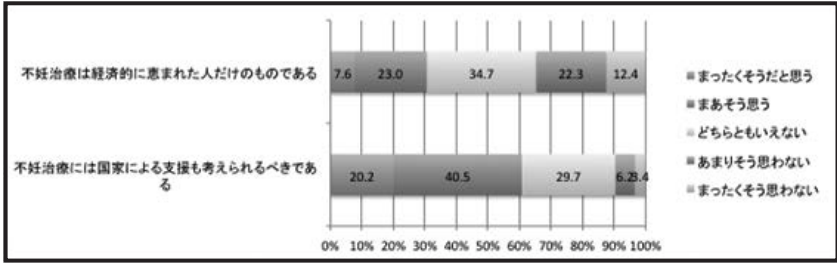


図11 不妊治療について

## 5. 「いのち」を保つ技術について

最近、ハリウッド女優のアンジェリーナ・ジョリーが、遺伝子診断で乳がんになりやすい体質であることを知り、まだ健康な身体を切除したことが話題となった。図12によれば、遺伝子診断を受けたいと考える人が4割を超えている。

また、ES細胞やiPS細胞を用いた臓器再生医療についても6割を超える人が積極的な考えをもっている。ただし、生殖器や脳に臓器再生医療を適用することに肯定的な人は5割弱にとどまる。

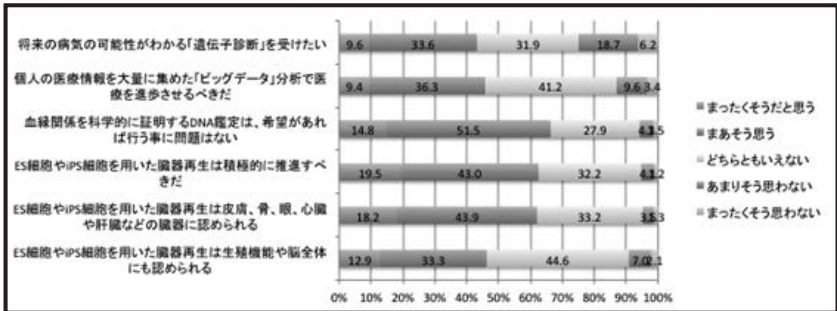


図12 先端医療について

## 6. 「死」について

図13では、「死」の判断と「臓器移植」について尋ねた結果を示している。

人間の「死」の判断を「脳死」によって行うかについては、肯定が4割弱、否定が1割程度である。ただし、「どちらともいえない」が5割を超えている。

「臓器移植」については、「脳死」でも「心臓死」でも、5割程度が肯定している。ということは、「脳死」と「心臓死」をあまり区別して意識していないということかもしれない。

「臓器提供の意思表示」をしている家族については臓器提供を承諾すると答える人が5割いるが、「意思表示していない家族」については承諾すると答えた人は2割強、承諾しないと答えた人が3割強となっている。また自分自身については「臓器提供の意思表示を行うつもり」であるのは4割弱である。

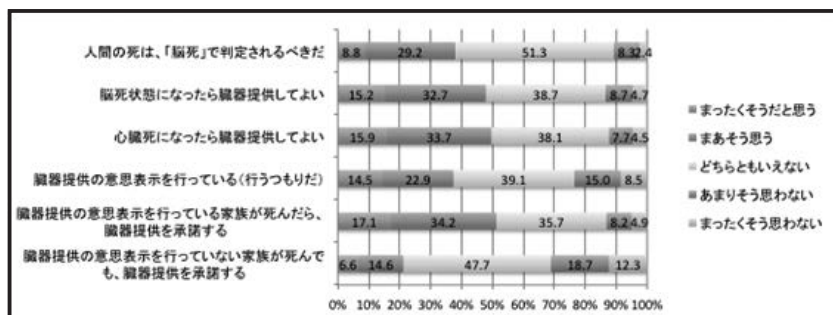


図 13 「死」と「臓器移植」について

最期に先端医療の今後についての回答を見てみよう。

生命自体を再製する「クローン技術」を推進すべきだと考えている人は1割強しかない。むしろ反対の人が約45%いる。

また、「医療技術の進歩が社会問題を引き起こす」と考える人が5割、「先端医療についてはよくわからない」と答える人も約5割である。

人間の命に関わる医療技術については、技術を進歩させるだけでなく、技術に関する理解や、その社会的影響について、十分に議論をしていく必要があるだろう。



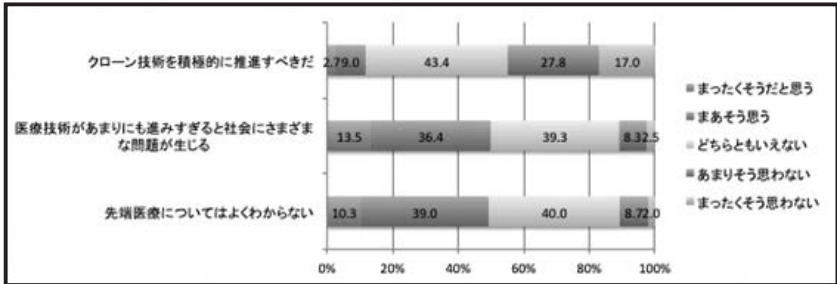


図 14 医療の今後について

## 7. おわりに

以上、本稿では、現代における「いのち」に関する人びとの意識を概観してきた。今後、さらに詳細な分析を行いたい。

しかしいずれにせよ、技術に関する理解や、その社会的影響について考えていくことは喫緊の社会全体の課題であろう。

### 【付記】

本研究は、一般社団法人・昭和会館の2014年度助成を受けて行われたものである。記して謝する。

### 【関連拙稿】

遠藤薫, 2015, 「現代の雇用危機を考える—社会システム論の立場から」『学術の動向』2015年9月号 (予定)

遠藤薫, 2015, 「大震災後の社会における「若者」—高齢化と人口移動と「孤立貧」」『学術の動向』2015年1月号

遠藤薫, 2014, 「生と死のシナジー」今田高俊編『シナジー社会学』東京大学出版会

